



目 次

国民精神の涵養……………	本	本
信仰と感激……………	本	多
国防上の急務……………	細	多
我等いかに進むべきか……………	森	日
力強き足跡……………	山	辰
法華經要文講義……………	本	生
	多	生
	日	生
	東	生
	修	生
	雄	生

第廿八年一月號



統

國民精神の涵養

本 多 日 生

一、緒 言

私は昨年十一月十日御發布になりました詔書の御精神を御話し申上げたいと思ふ、講演の題は「國民精神の涵養」と題して御話し致します。詔書の中にある一番初の教は、「國家興隆の本は國民精神の剛健にあり、之を涵養し、之を振作して、以て國本を固くせざるべからず」と御示しになつて居る、又その先の方に於ては、教育勅語と成申詔書の大體の意味をお引きになつて、そして「是れ皆道徳を尊重して國民精神を涵養振作する所以の洪謨に非るなし」と仰せられて居る、即ち教育勅語も成申詔書も、共に國民精神を涵養すると云ふ事に歸着するのであります。されば今度の詔書に示された事柄は、之を捲いて一つの意味に纏めますと、國民精神の涵養と云ふ事であると心得て差支ないと思ふ、故に色々結構な御示しがあるけれども、その一々を御話しする事はやめにしまして、本日は一切の御示しが一番よく纏つた、國民精神の涵養に就て申上るのであります。

二、民族の性向

國民精神とは何んなものであるか、我が日本の建國の當初から今日まで養ひ來つた、國民一般に共通せる美しい精神を指して、國民精神と云ふのである。國民の中には一人や二人は盗人根性があつたり、嘘つき根性があつても、その盗人根性や嘘つき根性が國民精神では無い、それは國民精神が脱線した時に起るのである。祖先以來三千年間養ひ來つた、そして我等日本人の全體に共通して、之が國民精神である人に示すには、盗人根性や嘘つき根性では無い、上は神様の前に持ち出して、又外は世界各国の國民の前に持ち出しても、之が日本人の精神であると誇るに足るものを國民精神と云ふのであります。そしてそれはその國の歴史の事實によつて養はるゝのである。

我國は永き歴史を有して居ります。他の國は途中で屢ば國がヒツクリ返つて居る、例へば支那の如きは三十八回も國が變つたし、露西亞の如きも幾度か國が變つた、殊に最近には大ヒツクリ返りに變つて居りますが、我日本は神様が國を建てられてから下つて神武天皇に至り、神武天皇から今上天皇に至るまで一度も國家の統一を破つた事はありません。故に誠に順序よく國民精神が養はれ來つたのである。今頃浮華放縱の習ひ漸く生ずるに至つたのは、之は現代人の不注意から起つた大失敗であり、國民精神の大脱線であります。そして昔から我等まで國家が順當に進んで來たのは、少しも申分のない、玉の様な精神を持つて居つたからである。それはどこから出來たか云ふと、國民の性質が良いから……國民の種が良いからであります。芋を作るのでも、大根

を作るのでも、種の質が良いと、ごんなに世話をして芋も大根も出來ないが、大和民族は種が良いから育てようで良く出來るのである。昔は我國土にアイヌ族が棲んで居つたが、あれは種が悪くかつたから、次第に衰へてしまひ、そして我等の祖先が勝を占め、爾來今日まで榮えて來たのである。國民の中には南洋系もあり、蒙古系も混つて居るが、大和民族が中心になつて、皆な之に化せられて、今では凡てが同じ民族であると云ひ得べく、そしてその日本民族が年々ドシ／＼膨えて行つて居る、年に六十五萬人づゝ生み出しつゝある、又盛なりと云ふべしであるが、之は何を意味するかと云ふと、此の民族の性質が良いからであります。そこへ日本は氣候が良い、大根を作るのでも氣候が良いと出來損ふが、大日本帝國は世界中で一番氣候が良いのであ

る。又地理の關係が良い、周圍海を以て繞らして居るから、國民の精神が良くなる、丁度一つの舟の中に乗つて居る様に、國民相互に極めて優しい、協和力を生ずるのである。所が大大陸積きの國であると、悪い事をしたものや喧嘩をした者も、山を越えて逃げてしまふから行先が分らない、そして又其後にコツツ戻つて來る様な譯で、民心が悪くなるが、我國は四周海であるから容易に他の國へ逃げる譯に行かない、自然民心が良くなるのであります。又品物を送る時にも海だから便利である、例へば米百石を名古屋から東京へ送らうとするに、陸だと中々困難であるが、海だとすぐ東京へ送る事が出来る、故に我國であればその國が發展するのである、世界では英國が發展して居るが、その如く日本は國は小さいが海で取捲かれて居る國なのであります。又人は山

に這入ると牛の様にムク／＼してをるが、海岸に來ると精神が快活になる、そこで日本人は皆快活な氣象を有して居り、大發展をする氣象を生じたのであります。そこへ風光が美しい、氣候地理の關係から山には青い木が生えて居るし、河には清い水が流れて居り、美しい花が咲いて綺麗な日が照す、そこで國民精神がドシ／＼よくなる。以上の如き色々なものが纏つて國民の性質を成してゐるのであります。すから、養ひ様で立派な者が出来るのであります。

三、國體の卓越

それから一つ大事な事は國體の尊嚴で、之が日本の特色であります。凡てその國民の精神は國體から現れて來るものである、丁度會社の職工の氣分が良くも悪くもなるのは、會社の成立ちから異つて來るので、會社の性質が職工の性質になるのである。

建國己來六千萬國民がかく信じ來つたのであるからそんな事は考ふる必要はない、三千年間お互の先祖が何故かと云ふ様な事を考へずに傳へ來たのであるから、之を國民精神の基礎に置くべきであります。そしてその建國の神様から傳つて天照大神となり、伊勢の太廟として五十鈴川の上流にまつられて居る日本人は太廟に參拜すると必ず頭を下げない者はない、其の末が神武天皇となり、今上天皇となつて、一系亂れずに皇統連綿として續き、歴代それが賢い事と、親切な事と、公平な考とで國民一般の事を考へ給ふたのである、殊に明治天皇が知られて、日本人の國民精神は歐米人に負るものでない、明治天皇の聖徳によりて、我國を脅かさんとした國難を國民精神の發揮により打克つて、日本は世界の一等國となつて進んで來たのである、故に國民精神の立派

會社が良いと職工が良くなるし、會社が悪いと職工が悪くなる、例へば造船所に就て考へても、三菱の長崎や和田岬造船所には一種の特色とすべき美風がある、所が俄に出來た造船所では寄合勢であるから悪くなるのである、皆が悪い譯ではないが、新しい爲に色んなものが這入つて居ると、中々全體が良くなる事が出來ない。處が日本は國の創めは神様から出來て居る、神様とは何を意味するかと云ふと、神様は馬鹿な者では神様と云へない、又性の悪い神様とか、ズレイ神様と云ふ者はない、神とは人を憐み人の爲に親切を盡し、物事に對して公平なものである、剛巧で親切で公平なものから、日本の國家が出來たのである。かゝる國は世界中どこを探してもない、そしてこの建國の事實が嘘だとか本當だとか云ふ事は、國民にとつてはいつでもよいのである。

な事は皇室の聖徳によるのであります。凡て手足が働くのは頭がよくないと駄目であるが、日本人の國民精神が今日あるのは、手足丈でよくなつたのではない、皇室の尊嚴が之を然らしめたのである、そしてその事を國民は皆なよく知つてゐるのであり、國民はその事を考ふる度毎によくなるのであります。人間の精神は向ふものによりて良くも悪くもなる、親が親切であると、子供が孝行になるし、あまり酒ばかり飲んで我儘であると、それはお父様少々無理だと云ふ事になる、親切な親で子供を可愛がること、子供は恐れ入りましたと云ふ事になるのであるが、天子様は丁度その通りであつたのであります。明治天皇は御自分で人民に先んじてお苦勞遊ばされて居る、そして若し百姓に罪があるならば自分が代つて引受けること仰せられた。

罪あらば我を罪せよ天つ神

民は我身の生める子なれば

國民は陛下の子であるから、若し罪があるならば、陛下が之を引受けると云ふ事を、ごく眞面目に明治天皇は伊勢の大廟に御出ましになつて仰せられたのであります。かく云はれると國民は恐れ入りましたと云ふ事になる、故に國民はどんなすばらな者でも我皇室の事を考へると恐れ入るのである、されば明治天皇崩御の際には二重橋に一同が集つて、砂の上座つて御平癒を祈つた、監獄に這入つて居る人殺しをした犯人までが、御崩御を聞いて泣かないものはなかつた、それ程日本の國民は、陛下を有難く思つて居た、皆な陛下の聖徳に感孚されたのである。感孚とは卵を親鶏が温めると孵化する如く、國民は皇室の羽翼の下、大御心の中に温められて恐れ

入つて居り、そして忠勇義烈の國民精神を發揮したのであります。百度誠に恐れ多い譬であるが、佛教の中にある譬に、國民の性質は、丈夫な女が子供を生む如く、そこへ飛び切り上等の夫である皇室を戴いて居るから、國民の忠勇義烈の金太郎が飛出したのであります。(未完)

發行所 統一編輯局 (電東五四八七番)

大僧正本多日生親下講演

國民精神の涵養

國民精神作興の詔書の綱領を本多親下の講述せられたるもの、大惨害に當面せる國民の覺悟の姉妹篇として出版しました、是非御講演を、

一部金五錢郵税金貳錢 百部金參圓五拾錢(送料共)

信仰と感激

四、恭順と感激

それから次に恭順と感激の事を申して見たい。此の場合にもやはり感激が大事だと思ふ。先づ釋迦如来に就て言へば、菩薩行の時に感激精神に依つて色々な行をなさつたもので、殊に思のある所はそれに対して必ず恭順を表せられた。長者を敬ふといふ事は菩薩行の最も大切な事になつて居る、長者といへば親も長者である、師匠も長者である、國王も長者である、自分の先輩も長者であるし、自分の兄弟子も長者である、すべて世の中に自分より先立つ所の者がある、その長者に對して尊敬を拂ふといふ

本多日生

感激

事が、最も大切な事になつて居る、恭敬尊重の心とお經に説いてありますが、誰にでも頭を下げる、佛法ぐらゐる頭を下げるものはない、だから佛教の儀式ぐらゐる頭を下げて拜むものは無いだらう。今でも佛法の儀式としては禮拜の行といふ事を盛にやる、或る団体では人に會つた場合にもちやんと掌を合せてさうしてお辭儀をする、さういふ儀式も出來て居る、禮拜恭敬といふ事は佛法の定則である、さうして長者——己れより上に立つ者は皆これを尊敬をした結果、釋迦如来は無見頂相といふものを得られた。無見頂相といふのは、佛様の頭の上は誰も見ることが出来ない、目連尊者が神通力を得て居る人で、どうか

して佛様の頂きを見ようと思つて上に昇つて行たけれど、ナンば昇つても、佛様の肉髻相といふその頂きの上を見る事が出来なかつたといふ事がお經にある、それが無見頂相といふので、佛の三十二相の中にその頂きを見る事無し。佛様の頭の天邊を見る事が出来ないといふ相がある。何故に頂きを見る事が出来ないかといふと、長者を敬うてよく頭を下げられた、その結果頭の上に徳が積つて、今度は何人もこの佛様の頭を見下す事の出来ない無見頂相を得られたといふのである。これはたゞ何でもない事のやうに思ふか知らんけれども、決してさうではない、佛敎の信仰に於ては非常な大切な事なのである、今の思想は丁度正反對である、今は頭を下げるといふ事が最も悪い事のやうに思つて居る、今は頭を下げない時代である。此の頭の上には誰も乗る者

が無いといふ事を西洋で言ひ出した、此の吾輩の頭の上に乗るべき者は無い、國王といつても同じ人間ぢやないか、國王が吾輩の頭の上に乗るといふ事はない、親だつて同じ人間ぢやないかといふ、所謂人格平等論で、初めから自分の頭の上に誰も乗らぬといふ議論である。だからいきなりデモクラシーといふと、頭の上に誰も乗らぬといふ事を唱へて、人が定めた規則なんか頭に置いてはいかぬ、俺が承知せぬ間は乗せることは出来ない、どんな事でも自分が承知しなければならぬ、そこで自分達が代理者を選挙してすべての事を決するんだといふ、往來で小便したら五十錢罰金を取られるといふ事も、承知せぬ中に定められちや困る。委員を選んで承認を経てやらなければいかぬ……といふやうな事で行く。非常に西洋人は此の自分の頭の上に誰も乗らぬといふ事

を鼓吹して居るが、佛敎はさうでない、敬ふべき者にはさかんに頭を下げるといふ正反對の議論である、東洋ではさういふ頭を下ぐべき所に頭を下げない者を馬鹿といふのである。子供に就て見たら直ぐわかる、家庭でちやんと子供を躡けてある所では「坊やお客様にお辭儀をなさい」と言へばちやんとおろつしやいと言つて頭を下げる、下げる子供は上等な子供である、所がなか／＼下げない、親父が無理に下げさせようとすると「嫌だ」と言つて逃げ出してしまふ。これは西洋流の子供だ。西洋流の子供がえらくなるか、東洋流の子供がえらくなるか、諸君の家庭に於て實驗して御覽なさい。西洋流に、俺の頭の上には誰も乗る者は無い、親が何だ、國王が何だといふやふな事で行つたならば、碌な人間は出来はしない、それは實に明かな事である。そこでお釋

迦様は柔和質直といふことを言はれて、如何なる場合に於ても心を和けて、さうして素直なる事は赤ん坊が母親に従ふが如く、羊が牧主に従ふが如く、此の從順といふ事が宗教の本性である。それで之を一言にして「直心」と言つて居る、この素直なうぶなる精神が大切である、子供なら子供にしても、佛様の前へ連れて行けばちやんと頭を下げる、何處の家庭でも、朝起きたら「お早う」をなさいといへば子供はちやんと「お早うございます」と言ふ。之をせぬやうになつたらどうぢや、人格は平等であるから親父の前だつて頭を下げるな、何でも頭下げるな、といふやうな事ばかり教へて行つたならば、非常な間違ひが出来るのである。學校でも「家へ歸つたならば只今歸りました」と言はなければいけないと教へる、これはやはり大事なことぢや。人間の眞

直な精神から行けば、長者を敬ふといふ事は當然である。

日蓮聖人の上に移つて考へると、一層これが感激的によく現れて居る。即ち暮れ行く空の雲の色を見るにつけても、或は有明け方の月の光を見るにつけても、心を催す思ひなりと言はれた、心を催すといふのは何であるか、心を催す思ひといふことは即ち感激である。暮れ行く空の雲の色が夕日に照されて赤に黄に光り輝いて居る、如何にも美しい、何とも言へぬ美つくしいものである、我が信する佛様は彼處にお居でなされる、その佛様の光があれに現れて居るのか、我が肉眼を以て見えるのは暮れ行く空の雲の色であるけれども、あれよりもより美しい佛様のごさるのちやなご思つては、その自然の美を通して本佛を憶れるから、暮れ行く空の雲の色を見るに

つけても心を催す思なりといふことになる、即ちこれは感激である。明け方の月の光を見るにつけても本佛の大慈大悲の御光はあの月の光よりもモツと和らかな、温かき光を我が頭の上に發射せられてゐるのである、月の光は肉眼を以て拜し得るが、本佛の光は信心の眼に依つて之を見るより仕方がない、月の光を見ては眼を瞑つて、本佛の慈悲の光は尙ほ結構なものだらうと思つて、佛様を憶れて南無妙法蓮華經と唱へるといふやうに、月を見るにつけても感激し、暮れ行く空の雲の色を見るにつけても感激をし、如何なる事に就ても、折にふれてといふから、其の出來事〳〵に就て感激をして行く、歌を詠む人であつたならば、どういふ事でもみな、折にふれてといつて歌の題にするやうに、其の出會ふ事柄に就て皆感激を持つて行く、それが私は非常な大切なこ

とだと思ふ。教をたゞ法華經の上からのみ感激しようと思つてはいかぬ、これは佛教では「用心」——用心を用ひるといふ事を云うてあります、それが必要である、用心といふのは日本では火の用心位に使つて居るけれども、元と佛教から出た言葉である、心を用ひるといふのは、今の暮れ行く空の雲の色に心を用ひれば、本佛の憶れがそこに現れて来る。或は上野の山の櫻花を見ても、人生の櫻さへも斯の如く美しいが、これが雲山淨土であつて、寶樹華果多く、諸天天の鼓を撃つてと説かれた其の淨土の花の美しさは、尙ほこれよりも結構な事であらうと思つて、櫻花を見ても其の奥にモウ一つ美しいものを見て南無妙法蓮華經と唱へる、人生のよろこびがあれば其のよろこびを通して、悦ばしいに就けても南無妙法蓮華經といふのはそれである。たゞ酒を飲んだ

り團子を食べたりして、團子がうまい、南無妙法蓮華經……モウ一パイ酌いで呉れ、南無妙法蓮華經……それではいけない。此のよろこびを通して、人生の悦びすら斯の如し、如何に泥んや雲山淨土の悦びをやと考へて南無妙法蓮華經……これでなければならぬ、其の雲山淨土の悦びといふものを今日は忘れてしまつて居る、たゞ法華經は有り難い、南無妙法蓮華經……團子がうまい、南無妙法蓮華經……それは實に俗化したる淺薄なる信仰である、偽の日蓮主義者が鼓吹したものであつて、此の位間違つた話はない、それは俗論といつて、無學の輩のやつた事である、本當の意味は今言ふ通り、花が美しいと言つてもたゞ普通の美しさではない、其の花を通して奥に雲山淨土の光がそこに映つて来る、そこが宜いのである。自分の女房が白粉をつけて綺麗にお化粧を

した「あゝ美しいナ、實に美人だナ」……と言つて女房をつかまへて南無妙法蓮華經……女房と酒を飲んで南無妙法蓮華經……さういふ俗論が多くなつて來居るけれども、さうではない、自分の女房さへも斯く美しい「お前も美しいが、更に諸天天の鼓を撃つて諸々の伎樂をなすといふ淨土の光景は、お前よりもモツと美しいであらう、併しお前も伴れて行くから宜いぢやないか、一緒に來い」……といふ其の絶對の價値を見なければいかぬ。そんな俗化したるところの思想は日蓮主義者の中には之を一掃しなければいかぬ、之を一掃しなければ文化の進歩開發の上に於て、日蓮主義の俗論といふものが跋扈して居つたならば、一遍にこれが爲めに篩ひ落されてしまふ、今の世の中は濁つたやうでも研究旺盛な時代であるから、だんく思想の研究が盛んになつて一

ふ。いつ迄も今のやうな間違つた事をやつて居つてはいかぬ、どうしても今申すやうに、暮れ行く空の雲の色、有明け方の月の光にも心を催はす思ひなりといふ此の意味會ひを諒解しなければいかぬ。又日蓮聖人は「徒らに遊戯雜談のみして明し暮さん者は法師の皮を着たる畜生なり」と言はれて、今の多くの坊さんのやうなだらしの無い生活といふものを非常に戒しめられた、どこ迄も緊張して眞面目に充實したる生活を日蓮聖人は要求せられたと思ふ、それもそこに日蓮聖人が感激を持つて居られるからである。ちよつと考へれば、人間は働くより寝て居る方が樂だといふやうな事にもなるけれども、理想を描いて感激した精神が燃えて居れば、どこ迄も奮闘努力して行くことが出來ようと思ふ。だからして此の恭順の精神に感激を加へれば「日蓮佛勅を蒙り

一段落を告げて行く時分には、此の不都合な奴を皆な振り落してしまはなければいかぬ、洗練して行く時分には間違つたものは皆指り落されなければならぬ、又サウ努力しなければならぬ。その時分には今の日蓮主義者の一般的な觀念のやうなものは非常な憐れな終りを告げるだらうと思ふ、其の時を待つて御覽なさい、純眞の議論のみが光を發する日が來るだらうと吾輩は期待して居る、吾輩は是非とも速く其の日に至らしめたいと思つて居る、今や日蓮主義は熾んなやうだけれども混沌として居る、それをモウ少し筋立つて秩序よく發達せしめるには、なかく今日氣を許すべき時ではない、それにはどうぞ佛天三寶我に生命を假して、少くともモウ二十年か三十年の壽命を與へられたならば、今のからくたは皆終りを告げて、最後正義の光を掲げて見たいと思

りて此の土に生れけるこそ時の不祥なれ」といふこととなる、此の釋尊に對する恭順とそれに對する感激といふものから、日蓮は佛勅を被むつて生れたものである、假令生命に及ぶ事があつても法華經に傷を附けてはならぬ、命を捨てゝも、何處までも臭き頭を法華經に捧げるといふことになつて、あの剛勇果敢の運動が起つたのである。それは皆感激を加へたからである、たゞばんやりして有難いといふだけではあれだけの力は出て來ない。

五、感謝と感激

それからいま一つは感謝と感激の關係である。感謝といふ事はモウそれ自身感激があるべきであるけれども、一通りの有難いといふだけではやはりいかない、感激的感謝といふものでなければならぬ。

その悦びの心が釋尊の上には如何に現れたかといへば、あの成道法樂の有様は、七日七夜の間その佛に成つた悦びは消えて居ない。非常に大きなものである。釋迦如來自身としては其の悦びを一切衆生に分けてやりたいといふ事をお考へになつたのでありましたが、壽量品に依れば、一切衆生如何なる者でも歡喜の心を發さしめる、如何に憐れな泣きの涙で居るやうな者でも、我が教の下に來たならば悦びに變るといふ、これは實に大きな事です。他のものではどうしても助ける事の出來ない、如何にも憐れな境遇に居る者でも、釋迦如來の教の傍に來れば皆悦びに變つて居るのである、それは年老いて子に死に別れ家を喪ひ産を失つてしまつたやうな者でも、釋尊の教の下に來れば非常な悦びに活きる事が出來たからそれが爲に貧女の一燈といふ事も出て來た、自分は

何も持つて居ない、頭の髪の毛を切つて捧げるより外に何れも無いといふやうな貧乏な女でも、女が髪の毛を切るといふ事は容易な事ではない、そこに非常な悦びがあつて、感謝の精神が湧いたればこそ、髪の毛を切つて賣つて燈を買つて佛に捧げた譯である、そんな例は澤山ある、如何なる者でも、非常な苦痛に居る者でも、釋尊の前に來て歡喜の心を發さぬ者は無い。現代人は教を十分に聞かないから、意味が徹底せないので悦びの心が出て來ないのである、悦びの心は解釋を用ひずしては出て來ないと思ふ、どうしても人生觀なり教義なりといふものに依つて所謂教化せられて悦びの心が起るのである、教を受けずしては悦びの心は出て來ない。であるから壽量品に於ては「若干の因縁、譬諭、言辭を以て種々に法を説き」能く衆生をして歡喜の心を發せしめき」

と言はれた、又阿闍世王のやうに、白癩病に罹つてからだは腐つて行く、からだのみではない、死んだ先は地獄ぢやといふことになつて、非常に苦しみの中に歎いて居る所の阿闍世王が、釋尊によつて救はれてそこに感激して、彼は非常な悦びを以て一切經を結集して後代に傳へるといふ事になつた。佛教の上にはあらはれて居る目ばしい事實といふものは皆感激である、阿育大王が八萬四千の堂塔を建て、佛教興隆の大事業をやつたのも感激である、日本の聖德太子が「篤く三寶を敬へ」といふ事を憲法に掲げられたのも、佛教に對する熱烈なる感激である。左様にして釋尊を中心として如何にも此の感激といふことが鮮かに現れて居ると思ふ。

して働いたけれども、それでも此のやうな法難に遭つたのである、頸の座にも坐り、流し者にもなつた、況んやお釋迦様が一切衆生を世々番々化導せられる所の御苦勞は、思ひやるだに實に恐懼に堪えぬ事である、日蓮は僅かに數十年の奮闘であるが、釋尊は五百座點劫來始めなき其の始めより、終りなき後に至つて、所作の佛事來だ會て暫くも廢せず、盡十方法界に亘つて衆生を化導せられる、思うても佛の大恩といふものは實に胸に應へる次第であると言つて居られる。それが分らないで、法華宗ぢやと言つて「自我得佛來……常在靈鷲山、及餘諸住處」と讀んでも其の意味がわからないで、たゞチャラジャブといふ事になつて佛様の有難味が身に沁まぬとなければ駄目ぢや、先づ隅田川へ裸にして抛り込ん

日蓮聖人に於ては無論の事でありまして、日蓮聖人の感謝は、自分が法華經の爲に少しばかり味力を

なれば駄目ぢや、先づ隅田川へ裸にして抛り込ん

で十日ばかり漬けて置いて、それから曹達で三日も煮てからでないど話が分らない、あまり物が間違ひ過ぎて居る。如來壽量品……「始來つて何だ」そんな事知りません」「自我得佛來は……」「知りません」「速成就佛身は……」「それも知りません」……初めから終ひまで何もかも知りません、ぢやないか、そんな馬鹿な事はありはしない。だから日蓮聖人のやうに自分が法華經の爲に盡しても釋尊の事を信じ、自分が迫害の苦しみを受けるに就つても、日蓮が少分法華經の方人仕り候だにも其の大難忍び難し、如何に況んや釋尊の世々番々の御化導思ひやるだに道理申すばかりなし、考へて見ても恐懼に堪へぬと言つて感激して居られる、それが本當の日蓮主義ぢや。

それから日蓮聖人は伊豆の伊東に御流罪になつた

頭を斬られながら悦んで居る。それは今の所謂感激感激であつて、こんな有難い事はない、法華經の御爲に身命を擲つて、法は重し身は輕し、この身を捧げ了つて法華經のために盡すといふ事は、こんな有難い事はない、過去幾たびか命を捨てた事があらうけれども、いつも無駄な事のために捨て、居る、今度法華經のために此の一命を捧げるは、如何にも有難い事であると言つて、恰度武士が大君の爲に身命を捧げて討死するのを名譽とするが如く、日蓮聖人は法華經の御爲に命を捨てるのを、非常に感謝して居られた。佐渡ヶ島に御流罪になつても、あの雪の中で悦び通してある。境遇を考へれば如何にも辛い雪の中であつたけれども、聖人の信仰は感謝感激の涙に咽んで居る、一間四面の茅屋に雪が降り込んで來て、自分の袋の上に雲が降り積るやうな事があ

時に何を一番感激したかといへば、そこへ流されたが爲に法華經を夜も晝も修行することが出来る、末代に生を受けては、一生懸命修行を積まうと思つても、色々な事がそれからそれと起つてなかく心に委せないものだが、法華經の御爲に流されて見れば夜も晝も此處に流されて居る事に依つて法華經に盡して居ることになるから、こんな有難い事はない、風呂に入つて居る時も、夜寝て居る間も法華經のために流されて居ると思へば、實にどうも有難い譯ぢやと言つて、其の伊東の流罪に就て日蓮聖人は感激を以て迎へた、さうして感謝して居る、法華經の御爲に流し者になつたことを悦んで居る。龍の口の頸の座に坐つた時にも、これ程の喜びを笑へかし、くさき頭を法華經に捧げて金色の如來となるは砂を以て黄金にかふるが如し、是ほどの喜びを笑へかし

つても、それを見てはあゝ有難い事である、此の美しい雪は佛からお送り下さつた衣である、法華經には如來衣を以て掩はせたまふといふ事があるが、此の雪は釋尊より贈られたところの尊き衣であるかといつて感謝して居る。これは何も日蓮聖人が氣が狂つた譯ではない、それが宗教の良い所である、何とも言へない無限の感謝がそこに在る。雪が降り積つて凍えさせられる、その雪を見ても、佛より贈りたまひし衣かといふ感謝を以て之を迎へることが出来たならば、如何なる場合でも悦びに居ることが出来る譯である。又晩年身延の山へお入りになつても、あの不自由な生活であつたがそれを非常にお悦びになつて、身延くらゐ良い處は無いと云つて居られる。今行つて見ても身延はそんな良い所ではない、不便で仕方がないと多くの人は言ふでせう、それを日蓮

聖人は、「誠に身延山の栢はちはやふる神もめぐみを垂れ天くだりましますらん」——神様も御覽になりて、何と良い處ぢやナ、一遍身延へ行かうぢやないかと云つて神様も寄つてお出でなさる位である。さういふ風であるから「心無きしづの男しづの女までも心を留めぬべし」——山に入つて着を取るやうな者でも、身延の山ばかりは外の山と違ふぞといふことになる。紅葉いつしか色深うしてたえなくに傳ふ懸樋の水に影をうつせば、名にしおふ龍田川の水もかくやと疑はれぬ——「チヨロ」と懸樋を傳ふ水に紅葉の色が映つても、これは天女が天下つて紅葉見物に來たといふ龍田の川の水はこんなであらうかと思はれる。草の庵に霧深く樹にすだくさいかに糸玉を連き——さうがにといふのは蜘蛛の事ですが、その蜘蛛の巢に露がかゝつてキラ——と旭

日に輝いて居る、あゝ美しい玉を以て飾つてあるといふ帝釋天の喜見城も斯くやと疑はれぬといふ。それは自分の信仰のよろこびを以て外部を見るが故に心の中に一バイよろこびがあるから、何を見ても嬉しい譯なのであります。新様に信仰に感激の心が溢れて居る、これは皆今の感謝のよろこびに感激の精神が籠つて、何事にもさういふ強い刺戟が加はつて居るからである。誰しもさういふ事は多少考へるけれども、それに感激が伴はなくては駄目である、であるから教養上で學んだ事柄の一つの感激を加へるやうに考へて行かなければならぬ。それが私は諸君等が信心をして居る上に、其の優劣の岐れる所は、感激の力の弱いと強いとにありはせんかと思ふ、法華經が有難いといふことは皆一つである、「法華經は有難い」そりや有難い

サ「併し僕は其の點に於ては斯ういふ感激を持つて居る」イヤ僕はたゞ有難いと思つて居るが、少し氣が抜けて居る」といふ、そこが違ふ。その感激の抜けないやうに、あとから——感激の力を加へて行くといふ事の爲に修養が要るのである。だから唯だ同じ事を無意味に毎朝の勤行でも繰返して行くといふよりは、新しき感激を其の間に受けて行くといふことに注意しなければならぬ。たゞ形式的にいつも勤行を缺かさぬといふだけでは、形式は整うても精神に感激が抜けて行くから、恰度生花の形はその儘残つて居るけれども、水を揚げないから枯れた葉が残つて居るやうなものである、生花が水を揚げなくなつたならばそれ程つまらぬ事はない、所が横着なお寺などへ行くと、三ヶ月も前に立てた生花がその儘あつて、これは何といふ先生が立てました

といふ、成程恰好だけは残つて居るけれども花はみな枯れて居る。さういふ工合に今の法華の朝晩の勤行なども、三ヶ月も前に先生が立てた生花みたいで「チーン自我得佛來……」と型だけはちやんと行くけれども生氣が無いから「遠成就佛身……南無妙法蓮華經」勤行をしたらごんな氣持だ「ごんな氣持もしない、唯チーンぢや、……それではいかぬ。そこに精神的の感激をもつと強くしなければいかぬ。宗教が形式に流れると力を衰ふといふのはそこぢや、これは餘程注意しなければいかぬ。それは自分の精神に響く事と響かぬ事がある、同じ事でも皆が同じやうに響く譯のものではない、お月様の光を見ては感激しても暮れ行く空の雲の色には感激せぬ者もある、雲の色には感激しても櫻の花に感激せぬ者があつて、それは其の人の氣分に依る事であるから、自

分々々が感激をちやんと起し得るやうにして置かなければならぬ、それは線香を立てゝ感激する者もあり、花を上げて感激する者もあるが、何れにしても佛様に對して自分の精神の活き／＼して働かやうにして行かなければいかぬ。

私自身は簡単な方法で感激の出来るやうに工夫して居る、これは一番大事なことだから、自分はちやんと掌を合せれば感激するやうに工夫して居る、新うやつて掌を合せて拜んで、その掌を開いて掌を上に向けて捧げるやうにして頭を下れば、此の掌の上に佛様がズーツと降りてお出でになる、さうして南無妙法蓮華經と唱へれば佛と相抱擁することが出来る、私は小さい時分からこれを修養したものだから尚に簡単に佛様がズーツと掌の上に来られるやうに感應が自分に響くのである、これは人に教へたつて

頭を叩くのが一番早い譯ぢや、あまりひどく叩いて痛くても困るけれども、痛いか痛くない位の程度で、「本氣になつたかどうぢや」といつて叩いて見る、「どうぢや、佛様の有難い事が本當に頭に響いたか」コッソソ……これが一番宜い。その叩く代りにまあ打ならしを叩くのであれば、頭を叩く代りぢや、上等の者は打ならしでも宜いけれども、少し下等な者になると頭をどづく方が宜い、さうして本當に佛様どづく事を廢めない、これが一番確かである。けれどもそれも餘り鹽裁が良くないから、吾輩のやるやうな風にするのも良いと思ふ、掌を合せて、この掌を開けば佛様が其の上にバツと御降りになる、これは屢々やり居ると直ぐそれが簡単に現はれるやうになつて来る。さういふ事の方法の如何は私は問はな

チウ行く譯ではないが、自分としてはさうやつて居る。だから其の人／＼が多少の工夫を以て、どうしても佛様の有難いといふ事が考へられなければ、打ならしなら打ならしを叩いて、それに依つて自分の頭にビーンと来るやうにする、或は打ならしで行かなければ頭を叩いても宜い、コッソソ……どうぢや、これでもか、まだか……とやる。これは佛教に現れて居る、昔のやり方を見ても、其の人／＼みな違つて居る、瞑目してやつて居るのもあり、頭を抱へて居るのもあり、身を地に投じて居るものもある。それを今のやうに同じ型にしてしまつては少しも感激が湧かないから、やはり鐘を叩くなり、或は自分自身で頭を叩いたり、肩を叩いたり、頭を抱へたり、いろ／＼の工夫をやつた方が宜い、さうして自分が成程と頭に入るまで行かなければいかぬ。それはまア

いが、信仰に感激性を伴ふところの手段方法を其の人／＼が能く考へてお置きにならんければいくまいと思ふのである。それは生花の水揚法といふものは花に依つてそれ／＼違ふやうなものである、それを生花の形だけやつて水揚法を知らない者が生花の先生になつて居るやうなのが、今の普通の宗教のやり方である、吾輩は其の形よりも先づ水揚から花活は習つてかゝらなければ駄目ぢやといふことを申し上げて置くのであります。(終)

名古屋市東區田代町字城山常樂寺内
發行所 統一編輯局
(電東五四八七番)

大僧正本多日生貌下著 大慘害に當面せる國民の覺悟

一 部定價金五錢 郵税 金貳錢
百部割引金參圓五拾錢(郵税共)

國防上の急務

一、經濟問題

次に國と國との間に起りつゝある經濟上の競争を御覽なさい、敢て之を經濟的競争と云ふ必要もないが、事實に就ては戦争の惨害と論る所のない結果を賣す事に注意せなくてはならないのでありまして、其断ゆることなき競争であるだけ、戦争以上に面倒な問題となるのである。

此經濟的競争の結果漸次劣敗者の地位に立たなくてはならぬ事となれば、戦敗國と同様の運命に陥り國家の利権は悉く優勝者の手に歸し、遂に主權進侵させらるゝ事となるから、最早一國の體面を保つ事

續き十年には三億六千萬圓、十一年には三億五千萬圓、十二年の上季には約五億萬圓の輸入超過をなして居るのである。斯の如く毎年引續き巨額の輸入超過をなし、正貨の流出を繼續すると謂ふ事は、對外國係に於ける經濟的競争には連戰連敗と申して差支ないのである、早く此形勢を挽回せなくては今後何程も經ない内に我國の正貨は全く枯渴して仕舞ひ、外債に外債を重ねる外には何とも動きがつかなくなるのである。さあそうなれば最早經濟的國家の滅亡でありまして、唯さへ貧弱なる我國内の利権をも、皆外人の手に渡さなくてはならぬ事となりまして、今日の支那以上の窮乏に陥る事は火を觀るよりも明かな事でありませぬか、然るに何人も其原因は既に知つて居る事と思ひますが、知て而して尙ほ少しも其實を擧げ得ないのは、我官民擧つて其

陸軍少將 細野辰雄

すら出来なくなるのである、我隣邦支那の現状を見ても思半ばに過ぐるものがあるでありませう。

然らば我國の現状は如何であるか、私は遺憾乍ら我國の經濟状態は、外國關係から見ても、國內の狀況から察しても、最早や行きづまりの状態に陥つて居りはせんかと思ふ、而して是が救済も此儘押し進んで行くならば、輕々に救ふ事は出来ないだらうと考へるのである。先づ海外關係から見ても年々輸入超過を告げて居りまして、歐洲大戰の間は海外貿易に於て頗る優勢の地位に居りました我國が、戦争の終熄と同時に形勢は全く一變致しまして、大正九年度には三億八千萬圓の輸入超過となり、引

精神上に緊縮を缺き、目前の利害に没頭して居る結果に外ならぬと思ふ、政府は我國の物價騰貴が外部に對しては輸入超過の因をなし、内部に對しては國民生活難の基となるから、物價調節を其政綱の第一に掲げながら、政費の節減は容易は出来ないので、國內の最大消費者は政府自らやつて居ると謂ふ有様だ、國民も國民で勤儉貯蓄の風は全く掃蕩して、空しく多少の金のあるに任せて其購買力は實に盛んなものだ、元來我國は歐洲戰亂の餘波を受けて、餘り勞せずして巨額の収入があつたから、上下舉つて有頂天になつて金費ひが荒くなつた、其餘波が今尙繼續して居る、政黨員は黨派的偏見から國費を亂費して地方民の鉤機嫌取りに没頭し、所謂積極的政策と號して收支全く相償はざる山間僻地に迄も鐵道を敷設し、或は不急の港灣に巨額の國費を投ずる等經常費

目特別會計費目を追ひ年々四十億萬圓近くの國費を亂費し、其恩恵を笠に着て我黨加入を勧誘是れ努力と謂ふ有様だから、寔に以てたまつた證據でない、暗愚な地方民は國家經濟がどうならうが、是が經濟的國防の上に如何なる害毒を流そうが、そんな事は全く解らない、唯だ多數政黨の謂ふが儘に我田に水を充て、呉れるものが一番有り難いから、皆な其政黨の傘の下に集りて、茲に多數黨橫暴の幕が切つて下されて居るのである、積極政策も時代に依りては決して悪いものでない、經濟的餘裕のある場合は假令し最初の間は收支相償はないでも、漸次交通機關や港灣設備の發達の爲め將來の資源開發の爲めに益する事となるのだから、やつても宜しいのだけれども、歐洲戦後の各國の經濟狀態を達觀したならば、今日はそんな餘裕のある時代でない、年々歳々多額

は團體の力を利用して益々其賃銀の値上げを要求し、小賣商人は各其組合を利用して賣値の釣り上げをやつて居ると謂ふ有様である、一般消費者も多少の金のあるに任せて購買力依然旺盛を極め、青年男女は化粧品を亂費して、基礎的學術の研究よりも軟文學類の雜誌の購讀に學資の大部を振り向けて居る有様だ、是では國內に於ける經濟的素地の悪化は何處迄低下して行くか解らないではありませんか、殊に最も憂ふべき事は人々何れも安逸を貪り、成るべく働かなくなつた事だ、勞働者は歐米の八時間制度を我工場にも布かん事を要望し、其能率の點には少しも御構ひなく、成るべくサボつて、給料は成るべく澤山に支給せよと強要し、時に詰らぬ者に煽動されては同盟罷業をなし、怠業を續け、逆も能率の上り様はない、官公吏の中にも生活難に逐はれて業務に

の正貨流出を續け、國內の生産工業界の資本を枯渴しつゝあるのだから、事業資本に充つべき資金の如きも今日では益々高利を稱へて居るではありませんか、況んや政府の公債募集成績も漸次困難を感じつゝあるではありませんか、夫れでも積極政策を續けて地方愚民の利己心を煽動し、彼等の援助の下に我黨の大を維持する事に苦心せなくてはならぬであらうか。私は此恐るべき害毒政策を一掃せない間は物價調節の出來よう筈もなく、正貨流出の災害を防ぐわけにも參らぬ事と信じます、經濟的國防の見地から先づ國民は斯の如き恐るべき政策を排斥する事が急務ではなからうか。

又國民關係から見ましても、物價の高い必然の結果として勞銀も高くなつてはならず、小賣商人の利鞘も多く取らねば共に生活が出来ないから、勞働者實の入らぬものが少なくないと言ふ事だ、一家の主婦でもお料理や針仕事は何るべくやらぬのがハイカ、ただと誇り顔に、化粧お仕舞に一日の大部を費すと謂ふ有様で、近頃の女學校出身の若い妻君連に此手がだん／＼増して行くさうである、小學校の子供でも夏季休暇には海水浴か山地かに保養に出掛けなくては休暇明けの學校は片身が狭いと謂ふので、中流以下の家庭でも可愛子供の爲には種々工面をし、借金までして子供の轉地外泊に努めて居ると謂ふ有様で、遊惰放逸の氣風が家庭經濟の上に大なる悪影響を及ぼして居る事は眞に慨はしき状態である、國民一同は一日も早く是が覺醒に依つて我國の經濟的危急存亡の災厄を脱する事に努めなくてはならぬ、是が經濟的國防として國民の奮起を要する急務ではなからうか。

三、外交問題

次で恐るべきものは海外強國よりの壓迫外交である、是が又仲々の難物であつて、外交的手腕の如何に依りては堂々たる一國の地位も戦はずして其盛衰興亡を左右するものである、從來の外交は秘密外交であつて責任は其當事者にのみ限られて居る様だが、外交談判の結果我國に不利となつた場合には唯其當事者のみいくら責任を負ふた所で、其不利は國民全體の頭上に落ちて來るのであるから、國民はどうする事も出來ず唯だ馬鹿を見る外致し方がないのである、故に外交も國民全體の利害休戚より割り出された國民外交でなくてはならぬ、是が爲め國民は外國の事だからと謂つてばんやりして居つては相成らぬ、國民の總ては相當に外國の事情に通じなくては

べきである、私が獨逸に居つた時分に旅館の女中が新聞を見て居るのに、先づ第一に外國電報欄に目を注ぐのを見て大に感した事がありました、元來我國の頭には是迄外國の強き壓迫を受け、是か爲に直接苦んだ経験がない、従つて外國に關する知識が發達して居らぬから外國事情に無頓着なのは無理からぬ事ではあるが、今日では我國は世界を相手の舞臺に立ち世界の各國を相手にして居るのだから國民が斯の如く外交に無關心では外交折衝の上は大なる損失を招きはせんか、國民一同が大に覺醒せなくてはならぬ重大問題と思ふ、彼の華盛頓會議に於ける我國の立場はどうであつたか、英米兩國の壓迫の爲め我使節の内で二箇の異なつた意見を出たではないか、英米兩國は盛んに國民の輿論を喚起したに拘らず、我國の輿論は極めて無力ではなかつたか、一二

はならない、何時迄も鎖國封建時代の夢を見とつては相成らぬのである、我國の大新聞は早くも此點に着目して比較的多額の費用を投じて海外事情に關する電報を掲載し、社説を掲げて、國民に外國の事情の一端を報道して居るが、政府としては更に多額の國費を費して外國の狀態を調査しつゝあるに係らず國民一同に對しては何等の通報もせず、依然として秘密外交の鍵を握つて居るのはどんなものであらうか、國民も國民で今に島根根性が抜けずに、海外事情に關する趣味が甚だ薄い様だ、汽車の内で一等室に納まりかへつて居る紳士でも、新聞の二三種も取つて先づ第一に小説や三面記事に目を注ぎ、外國電報などは全く目も觸れぬと謂ふ相手を屢々見受けるのである、堂々たる紳士淑女でさへ有島事件や武者小路事件を第一の讀物とする様では他は推して知る

在野の外交通は盛んに輿論の喚起に努めたが、國民には何の反響も無かつたではないか、彼の山東問題に對する支那國民の叫びと、我國國民の聲とは何れが大きかつたか、是等の點より見ても寔に心耻かしき感が出てならぬのである、又近くは支那の排日問題の如きも唯だ政府の外交にのみ頼つて、國民としてどれだけ支那國民に對する態度を決定せんとして居るであらうか、甚だしきに至ては政黨政派の争ひから、我國の對支外交上に不利となつてもお構ひなく支那の排日團の味方となつて、所謂二十一個條約の攻撃を議政壇上にて臆面もなく喋り立て、一層支那排日團の氣勢を高めた政黨の領袖迄出て來たのである、私は現今支那の排日運動なるものは米國に對する日本外交の軟弱を誤解せる支那政客が、其

(以下三五頁へつゞ)

我等いかに進むべき乎 (上)

(本稿を記し了りし時九月一日の大震動に遭ふ予にとりては一記念稿なり)

森 川 日 修

我等人生の曠野に彷徨ひてた、花咲き風薫り、水清く野は緑り、目に見耳に聞くもの一として愉快ならぬものはなかつた。是れは束の間であつた、慈悲深き父母の膝下に眠り、我等の生れし家と村落と、近隣五六里の世界であつた、樂しきも無邪氣の樂しみであつた。我等は此の暖き緑りの褥に、甘き夢の世界に何時までも眠ることが出来なかつた。曠野を一步一步踏みだした。それは求知と云ふ欲念の爲めに、學窓より學窓と進んだ、學窓より人生の曠野を見渡せば、幼少の夢の世界よりは、人生は餘程意義

あるもので、一層樂しきもので、時には自分の爲めに世界が開展しつゝあるやうの幻想の怡悦を感じたこともあつた。

しかし學窓をいで、更に一步人生の曠野に、現實の世界に面して見ると、夢の世界幻想の世界のやうでなく、案外に荒涼慘憺、嵐に散る花あり、羽翼を失ふ鳥あり、鐵鎖につながる、憐れの獸あり、自然のまゝのび／＼と生立つ樹木は稀のやうに見へだした。

正義は常に勝利を得、惡は善に制せられるもの

このみ純淨に信せしものが、現實は邪は正を制し、惡は善を摧くやうに感ぜらるゝことも度々あつた。我等は進むべき曠野の道を失ふた、時に不安に、時に絶望に、時に自暴自棄に、時に卑屈に、此時我等は眞面目に眞剣に指導すべき者を求める。

歴史は不斷の崩壊と建設を我等に物語る。されど現在ほど大なる崩壊と建設に面接せしめられたることはない。我等は一面から見れば大なる不安の不幸であり、一面からは見れば大なる幸福である。小なる欲望は小なる幸福を産み、大なる欲望は大なる幸福を獲る、こゝに小なるものと大なるものと歩道を異にするこゝになる。

人生の曠野を歩むに、たゞ盲目的に行くところ迄行かう、何等考慮することなく反省することなく本能のまゝに行きつゝある人がある。これは鳥獸と何

等異なることなく、彼れは四足此れは二足、彼れは横行此れは立行位の差であつて、人生の價値を自ら放棄する人である。或は獵夫の銃を肩にし猛犬を使ひ、山野を跋渉し已れの食膳を賑はし自ら快とするやうに、時に生命を塔するも名と財と性の爲めに狂奔するものもある。これは普通世にもてはやさるゝ成功者又は何屋と稱せらるゝ種類であつて、人の價値としては輕微なものである。

我等海陸に棲息する無数の生物を見るにつけ、人は生物中の一部分である、その一部分たる人は現在に於ては確かに最優勝の地位にある、しからばその最優勝の地位にあるものが、劣等生物を學ぶにおよばない。我等は更に優劣の地位に進まねばならぬ、更に優勝の地位に進むと努力することこそ人に眞の快樂があり眞の幸福がある。

古より聖者と稱し賢者と呼ばるゝ者は此の道を指示せんとて立てるものである、故に聖者賢者の指示表は随分澤山あるやうに見える、しかしながら指示の原理は唯一のものであらねばならぬ、もし種々の表示があつたとせば人は何れの道をとつてよきか迷はざるを得ない、現在人が迷ひつゝあるのはそれである、現在の道德論宗教論多くは指示表の論議であつて、その根本に突入ておらぬやうに思はれる。木の枝葉の説明をいかに聞かされても我等は何等涼味を感じない、我等はその樹陰に憩ひ、人生曠野の熱氣を去り、心のまゝに涼味を受入れたい、枝葉の説明をしておる中に枝は折れ葉は飛び熱風頻りに至るから人は逆上の氣味になる。逆上するから猛烈なる破壊運動と人心の悪化が來たるのである、故に其根本に突入り根本を養成し人を此の樹陰に憩は

せねばならぬ。しかるに人生を指導すべき枝葉の説明は何れの聖者も大差なきやうに見えるが、其の根本原理に於て不完全の處があれば、従つて其の枝葉は早晚枯死する運命をもつてをる。我等其等の聖者の表示を見なければならぬ。

出埃及記に、イスラエルの子孫エジプトの地を出で、シナイの曠野に至りし時、モーゼ山に登り、神エホバより命をうけてをる、エホバ、モーゼに告ぐ。神の一切の言を宣て言たまはく、我は汝の神エホバ、汝を埃及の地その奴隸たる家より導き出せし者なり、汝が面の前に我の外何物をも神とすべからず、汝自己のために何の偶像をも影むべからず、又上は天にある者下は地にある者ならびに地の下の水の中にある者の何の形状をも作るべからず、之を拜むべからずこれに専ふべからず。我エホバ汝の神は汝の神なれば、我を惡む者にむかひては父の罪を子にむくいて三四代に

およぼし、我を愛しわが誠命を守る者には惡惡をばこして千代にいたるなり。汝の神エホバの名を妄に口にあげべからず、エホバはおのれの名を妄に口にあげる者を罰せばおがざるべし、安息日を憶えてこれを聖潔すべし、六日の間勞きて汝の一切の業を爲すべし、七日は汝の神エホバの安息なれば何の業をも爲すべからず、汝の子息息女も汝の僕婢も汝の家畜も汝の門の中に在る他國の人も然り。其はエホバ六日の中に天と地と海と其等の一切の物を作りて第七日に息みたればなり、是を以てエホバ安息日を祝ひて聖日とすたまふ。汝の父母を敬へ、是は汝の神エホバの汝にたまふ所の地に汝の生命の長からんためなり、汝殺すなかれ、汝姦淫すなかれ、汝盜むなかれ、汝その隣人に對して虚妄の證據をたつるなかれ。汝その隣人の家を食らなかれ、又汝の隣人の妻およびその僕婢牛驢馬ならびに見て汝の隣人の所有を食らなかれ。民みな雷と電と喇叭の音と山の煙れるをな見たり、民それを見て懼れたのゝきて遠く立ち、モーゼ民に言けるは長るゝなかれ神汝らを試みんため又その

畏れを汝らの面におきて、汝らに罪を犯さざらしめんために臨みたまへるなり。是において民は遠くに立ちしが、モーゼは神の在すところの雲に進みいたる。エホバモーゼに言たまひけるは、汝イスラエルの子孫に斯いふべし、汝等は天よりわが汝等に顯ふを見たり、汝等何をも我にならべて造るべからず、銀の神をも金の神をも汝らのために造るべからず。汝土の糧を我に築きてその上に汝の燔祭と謝恩祭、汝の羊と牛をそなふべし、我は見てわが名を憶えしむる處にて、汝に臨みて、汝を觀まん。

野蠻蒙昧時代の先覺者即ち當時の聖者は、祭政一致の主旨により各自の民族を激勵し稱揚し神政民の自覺を喚起し本能生活のまゝの人類を人らしく作りあげんとす苦心は、世界民族興起の普遍思想である、モーゼが濃雲中にエホバより神教を受け、罪惡を誡め人類を指導するところは洵に巧妙なものである。蒙昧時代には今日我等が考ふるやうに其事情を一

笑に附すべきものでなく、多分モーゼも神教を受け
たとふ信念があつたらうと思ふ、今日では神靈降
下の思想を科學者は變體心理作用であるといふも、
隨所に行はれ、古代イスラエル民族と少しも異なら
ぬ信仰を以てをるものが澤山ある。

しかし神エホバが、いかにも人間らしく、野蠻蒙
昧時代の面影を寫象してをることである。モーゼが
偶像禮拜、天然崇拜の纏りのつかぬ信仰と、本能生活
を否定し、エホバを視つめた處は確かに獸生活より
一步すすんだものである。

この神はイスラヘル人にのみ最も幸福を與へる神
で、嫉妬深く愛憎の神で、供養を求むる神で、六日
勞して一日息むところなぞいかにも人間味の神であ
る。しかし彼が養生を戒め、姦淫、貪慾、暴戾等を
エホバの名によつて本能を制戒せしところは當時人

の如く人に教へなば、天國に於て至善き者ぞ謂れん、凡そ之
を行ひ且つ人に教ふる者は天國に大なる者と謂るべし。

我なんららに告ん學者とバライサイの人の義より、爾等の義
こと勝すば必ず天國に入ることをばはじ。

イエスは律法と預言に新らしき氣息を吹込んだ、
律法と預言は學者とバライサイ人に依て死物となり、
遊戯の争議となり、無益の討論題となり、人生指導
に何等の力がない。イエスは學者とバライサイ人を幾
の奇よと属倒した。

彼は後に至り律法に重きを指かず、預言に拘泥せ
ず、彼自ら神の子、神のみ我を知る自覺に達した、
我は生命のパンなり、人もし渴かば我に來りて飲め、
我は世の光なり、我は善き牧者なりと叫んだ。

イエスの神の名はエホバなれど、モーゼのそれの
如く、嫉妬の神でなく、犠牲を喜ぶ神でない。愛の

心指導の原理として至上のものであつたと思ふ。
そこで指導の原理たる唯一神も年月を経るに従ひ
人心を指導するに足らぬことになる。一は供養の儀
式となり、一は神の説明になり、又は制戒解釋の論
争となり、何等力がない。かつ神の命と稱せらるる
者は顯現せぬから、イスラヘル人はメシヤの出現を
熱望せざるを得ぬ、この熱望に應じて最後に出でし
者は、誰ぞ、ナザレの賤民イエスである、彼の思想
は漸次變化し、かつ現今の基督教とは異なるとする
も、唯一神の創造神を、モーゼの創造せしまゝ一神
を視つめつゝ吾はメシヤなりとして立つた。

われ律法と聖言者を廢る爲に來れりと意ふ勿れ、われ來りて之
を廢つるに非ず成就せん爲なり。

われ誠にて爾等に告ん天地の憲ざる中に律法の一點一畫も違さ
ずして廢ることなし、是故に人もし誠の至善き一を廢り又そ

神である、初めはイスラヘル人の神のやうにも見へ
るが、後には人類の神であつた、若しイスラヘル神
神であつたなら民族の神で廣く世界に行渡るべきも
ない、愛の神、人類の神であるから世界の何れにも
見へる神となつた。しかし何れにしても人造の神で
あるから時と處により神は漸次變化しつゝあるこ
とは拒むわけにはゆかぬ。且つ東西の哲學に觸れ漸
次佛教の如來に接近しつゝあることは餘程面白い。
何時しか神の名によつて如來の説明をきく時がくる
だらうと思ふ。

イエス神の子であるといふ感情の高調すると共に
彼の言宣に彼の行動に益々熱を加へてきた。熱の加
はる反對に學者もバライサイもサドカイもますます彼
に對し嫌忌の情が高まつた、彼今は神の國へ行く一
路あるのみである。彼が神の國へ行く悶々の心情は

非常のものであつた、矢は弦を離れたり、彼は猶太國の王なりと稱せりとの言に依りて、彼れは羅馬の臣ピラトの法庭に磔刑の宣告を受けた。

何故に神の子メシヤは十字架に刑せられたるかは彼等聖徒には重大問題となつた、弟子中にも其見解を異にした、まして後來の聖徒は益々之を神聖化せねば措かなかつた。

最初はサタンに贖金を拂ひ、罪より人間を救ふたと見、或はサタンに拂ふにあらす神に満足と與へん爲めだと思つた。又は基督が罪人にかはり刑罰を受けたのであると思つた。或は此の死によつて神の律法と政治とを十分に満足させることが出來たものと思つた。又は人間に己の罪を悔い改めさせ神を愛するやうにしたのであると思つた。しかし是等皆イエスの死を神聖化せんとする偏見であつて、結局時代人心とイ

イエスの熱と衝突の外に別に別在意義のあるものでない。

安息日終つてのち七日の首の日黎明にマグダラのマリヤ及び他のマリヤその墓を窺んとて來りしに、大なる地震ありて主の使者天より降り墓の門より石を轉し其上に坐す、その容貌は閃電のごとく其衣服は雪のごとく白く、守兵かれを懼れ戦き死たる者の如くなりぬ、天使こたへて歸に曰けるは爾曹おそるゝ勿れ、我なんぢらが十字架に釘られしイエスを尋ることを知る、彼は此に在す、其言る如く、歸りたり、爾曹きたりて主の置れし處を見よ且つゆきて其弟子に告げよ、彼は死より歸り爾曹に先ちてマリヤに往り彼處に於て爾曹かれを見よ、我、これを爾曹に告げ、長ながらも甚く喜びて急墓をさり其弟子に告んと走り往り、弟子に告げんとて往るときイエス彼等に遇て安かれと曰給ひければ歸す、み其足を抱て拜しぬ、イエス彼等に曰けるは長るゝ勿れ去て我が兄弟にマリヤに往と告よ彼處にて我を見るべし。

イエスは復活した。熱誠なるマグダラのマリヤは

イエスに面し、而も其足を抱いた。聖徒は更にイエ

スの復活を神聖化し後には哲學化した、しかし復活の思想はイエスに初まりしにあらす舊約時代より預言者の再生の思想があつた、ましてイエスの人格と熱情を憧憬せし聖徒にして復活の思想を産出せしは別に不思議でない。しかし弟子中にも復活を信ぜざりし者もあつた。

十一の弟子セラヤに往りてイエスの彼等に命じ給ふ所の山に至り、イエスを見て拜せり然ど疑へる者もありき。

聖徒中肉のイエスの復活を信じたものもあつたらふ、もし肉の復活を見たせば確かに幻想とせなければならぬ、しかし復活をイエスの精神が信徒の心中に復活すと解せば此の記事も妄誕と排するにも及ばぬことであらう。

(此章未完)

(二七頁より續き)

事大思想に驅られ、親米排日の可能性ありと即断したる結果、東洋の平和をも危殆に導かんとする暴徒を敢てする迄に漕ぎ附けたのである、然るに是に對し我國民は恰も對岸の火災視せる有様にて、殊に軍人の如き全く無關心に看過せんとする状態であるのは、誠に奇怪至極と謂はねばならぬ、私はどうしても國民一同が速かに長夜の夢を破り、國民が一團となりて國民外交の素地を作る點に一層の努力を加へ外交的國防の急務に向つて直進する事を切望して已まないのである。

力強き足跡

山根 日 東

「思ふ事一ツ叶へば又二ツ三ツ四ツ五ツ六ツ七ツ敷の世や」と云ふ道歌がある、如何にも人類の當相を穿ち得た妙句である。一段突つ込んで云へば「一ツ叶へば」が問題である、一ツ處か半分も四分の一も中々以て叶はない、何事も理想通りに行かないのが世の中の常だ。さてこそ昔から「世路難」と云ふ堅くるしい熟語さへあるので、世の進歩に連れて浮世の波は日一日と荒くなる一方、之を切りぬけるには益々以て困憊辛勞の度を高むるのは、止むを得ざる世相とも云ふべき次第である。が併し七顛八起とさへ言はれてあるから、ゆめ嗟嘆の弱音を吐かず「何のその巖をも徹す桑の弓」大に勇氣を鼓して、戦つ

して大にやるべしだと折角意氣込んだ勇氣も、兎角は長保持がしないで中途挫折の憂いがある。一月二月は充分の緊張味を帯びて居ても、三月四月となり花は咲き鳥は啼づる、ツイ氣候に連れてだれ氣味を覺へて来る、何の少し位は氣晴しも必要と、そろ／＼外圍の誘惑に乗せられ避暑だ月見だ何だ彼だど遊び癖がつく、光陰矢の如く空しく過ぎ去りてとゞのつまり「越すに越されぬ年の暮」ア、／＼と、来る年も来る年も其様な事を繰返す仕儀、何と云ふ靡甲斐ない状態だらう。げに大晦日と云ふ大晦日、元旦と云ふ元旦の度毎に反省はする、回顧はする、するが併しそれが持続しないで「又うか／＼の元始」となる、是れがなべての人の世の相である。元來これには理由がある、維新以來幾十年、あらゆる階級の總てのものが、人類には知識と事業大切なりとま

て戦つて勝て戦勝者となるの覺悟と決心を以て、大いに活躍奮闘すべきである。又、「竹の一節を破れば餘の節從つて破る」と云ふ語があるが、實際人間の仕事は其皮切りが大事で、事業の矢面に立つ以上は、何物の障害も敢て辭さない、「何のこれ敷の事に閉口垂れて堪るものか、艱難己れを玉にする」のだとの決心と勇氣さへあれば、頓て第一戦線を突破し得る、従つて一難來る毎に勇氣百倍し、所謂「破竹の勢」でどん／＼勇ましく進んで行けるのである。けれども是丈けたゞ云つたのではちと案じられる、何故かと云ふに、「元日や又うか／＼の始め哉」で、今年は大に奮發

ではよいが、たゞその二倍條だけでやつて来た、所謂科學萬能の夢路を辿りて、何事も科學の知識にのみ偏頼して、今一つ人生根本の大事の／＼倍條を忘れて居た、それは何だと云ふに宗教の信仰である。信仰は力である、眞信仰に活きて法悦の湧く處、其處に徹底的勇氣生じ、百難千難を突破する事を得るものだ、之に反して信仰なき人間は絶待界と何等の交渉無き淺薄極まるものである、従つて力がない悦びがない、其知識も事業も薄ッペラなもので剛健味質實味を缺くのは勿論の重である、少くとも耐難の眞の勇氣は眞信仰より湧き出たので無くては駄目である。然らば信仰さへ有れば何でもよいか、傳來の普通の信仰でよいかと云ふに、そうはいかん。文明の進歩は無意味の信仰を許さない、鐵の頭も信仰からではいけない、哲學的眞理に一如せる完全宗教の

眞信仰でなくては物の用に立つべくもない。談道が馬鹿に難解しくなつたが、手取早く立正大師日蓮聖人を紹介することゝしやう。

「足跡をたどれば易し雪の路」お互ひ眞の修養を積まんとには、日蓮聖人ほど恰好の又適當の人格模範は見當らない、その大なる足跡力強き芳躰を辿るならば、積雪幾十丈あらゆる難難も何のその、美事目的の彼岸に達し得らるゝ、ゆめ中途挫折の憂いはない。日蓮聖人の遺文を繕いて至身の血汐の湧きかへる思いに打たるゝのは、一生を通じて迫害多難の中に在りて聖人が何等の不平等も何等の悲觀もなく、始中終法悦に一貫されたる事蹟である。古今東西宗教史上に自から襟を正さしむる壯烈悲痛の殉教者は少なくない、が特に聖人の迫害を最とする。而も聖人の法悦を傷けんには皆餘りに力なきもので有た。

れ給ふた時も、

彌々法華經ノ信心コソマナリ候へ、第四ノ卷ニ云ク此經ハ如來ノ現在スラ猶怨嫉多シ況ヤ滅度ノ後ヲヤ、第五ノ卷ニ云ク一切世間怨多クシテ信ジ難シ等云々日本國ニ法華經ヲ學スル人ハコレ多ケレドモ法華經ノ故ニアヤマタル、人ハ一人モナシ、サレバ日本國ノ持經者ハ名計リニテ未ダ此經文ニハ値ハセ候ハズ但日蓮一人コソ讀ミ侍レ我不愛身命但惜無上道是ナリ、サレバ日蓮ハ日本第一ノ法華經ノ行者ナリ。

とは聖人の愉快の聲である。又思ふだに身の毛の慄立つ龍口斷頭場に据へられた其時も、

日蓮之ヲ見テ思フヤウ日來月來思ヒ儲ケタリツルコト是ナリ、幸ナル哉法華經ノ爲ニ身ヲ捨ン事ヨ、臭キ頭ヲ刎ラル、ナラバ沙ニ金ヲ替ヘ石ニ玉

聖人は是等幾多の來難に當面して、「元より存知の旨なり」の一句もて片付けられた、何と云ふ力強い權威ある申分であらう、現代語に之を換言すれば「覺悟の前だ」若くは「豫定の行動だ」と云ふ確信よりほとばしる聖き力ある一言である。さらばよ、伊豆伊東の流論の身となり上原彌三郎夫婦の情誼によりて僅かに壽命を繋ぐと云ふ、いとも心元なき生活の間にも、

去年ノ五月十二日ヨリ今年正月十六日ニ至ル迄二百四十餘日ノ程ハ晝夜十二時ニ法華經ヲ行ジ奉ルト存候、其故ハ法華經ノ故ニカ、ル身トナリ候へバ、行住坐臥ニ法華經ヲ行ズルニテコソ候へ、人間ニ生ヲ受ケテ是程ノ悦ハ何事カ候ベキ。

とは、聖人の心の底から湧き出たる喜悅の言葉である。東條小松原に漸く身を以て法敵景信の毒刃を免

ヲアキナヘルガ如シ——サレバ日蓮貧道ノ身ト生レ父母ノ孝養心ニタラズ國ノ恩ヲ報ズル力ナシ、今度頭ヲ法華經ニ奉リ其功德ヲ父母ニ回向セン其餘リハ弟子旦那等ニハブクベシ。

と泰然自若たる其容姿の端正にして威徳ある、之を鎖れば愈々堅く之を仰げば愈々高き、眞に無上崇嚴の極である。我等は此力強き芳躰を偲びて、恒に剛健質實の氣を養い耐難忍苦の修養を積み、正義の威念と不拔の信念もて浮世の荒波を凌ぎ切ることの光榮を感謝せねばならぬ。

詔書の聖旨を奉戴し

國民精神作興の講演會を

本多管長親下大都市に開く

民風作興の御聖旨を以つて畏き邊より恐懼置く堪はぬ詔書御降下を受けてわが本多管長親下は、十一月の兩月に亘り大阪、京都、名古屋、廣島、岡山、福井、豊橋、四日市、一の宮の各都市に國民精神作興の大獅子吼を爲し御詔書の聖旨の徹底を期した、今、名古屋に於けるその状況を當時之を詳報した新愛知新聞紙上より轉載しその一斑を報じたい。

詔書と日蓮主義を

説いた夜の名古屋市の大盛況

詔書の聖旨徹底を期する爲めの民風作興國民精神作興講演會は十二月十五日午後六時より市内中區八百屋町妙行寺本堂に於て川崎英照師の「地を真劍に」の開會講演に依つて始められ川崎師の講演後急激の拍手を浴びて大僧正本多日生師登壇し「詔書と日蓮主義」の題目のもとに「詔書の聖旨を奉戴し之を遂行するには國民精神を涵養せざるべからず」と冒頭し國民精神に就いて、一、國民精神の意義、二、國民精神と國體、三、國民精神と皇室と分類し平易な語句の裡に國體の大義を説き最後に「神、儒、佛の三教を依り日蓮主義に依らざれば之が遂行すへきに非らず」と説破し降壇した此の夜主催者統一團員

△千葉縣の各地

前の内常覺寺では八月中旬に三回、九月一回十月中に三回、婦人會青年會題目機等を聞き、中嶋元道師が講演した。

村田泉福寺では九月十六日慘死者の追悼會を修した、又九月中旬に三回、十月中に二回、十一月中旬に三回講演會を開き、堀江會誠師等が講演した。

馬來田青年團では八月十五日夏季講演會を同村小學校で開催し、武田文學士講演、聴衆團員百五十名、盛會であつた。

△羽前教信

梨郷本覺寺では立正大師宣下紀念碑を建立し、十月十五日日暮山主導師として、盛大なる落成式を舉行了。又彌金寶藏寺では十月廿二日慘死者追悼會を舉行了。其外本覺寺寶藏寺で十月中に四回講演會を開き、日暮村田鈴木氏が講演した。

△統合宗學林生夏季布教

統合宗學林生淺邊泰道、大川孝準、大嶋正道、安藤純爾の諸氏は、栗原教諭を指導として、夏季實習布教團を組織し、七月十七日東京を發し、東海道の北松野を振出しに、吉美二川を経て京都に入り、大阪、堺、神戸、尾道、吳、廣島を経て、同月廿九日朝鮮釜山に渡り、京城、平壤、新義洲、安東の各地に講演しつ、南滿洲の奉天に達し、轉じて營口の妙光寺を訪れ、到る所に日蓮聖人の教を獅子吼して、八月十六日無事本土に歸還した。

名古屋自慶會報

大正十二年十月

廿六日豊田本社に於て、本多親下の「如何

妙教婦人會員等の連夜の宣傳物を奏し會場は超々聴衆を以つて満ち其數千餘人入場不可能の爲煩つた者三百を數へ頗る盛會であつた。

大正十二年後半各地教信

各地教信の要目だけを摘記する、震災後紙面の混雑が恢復されなかつたのですが、來月號から常態に復する事が出来ようと思ひます。

△統合宗學林の追悼大講演會

十月十日、統合宗學林布教部の主催で、慘死者の追悼大講演會が、同學林の講堂（移築された圓常寺の本堂）で開かれ、田久保忍、大橋司一、小安齊、島田憲一、鶴澤一夫氏の講演の後、佐藤鐵太郎中将が「破壊と創造」と題して説く所があつた。

△東金の震災犠死者追悼會

千葉縣東金町本漸寺では秋季彼岸初日に追悼法要を設け、中村爾正、武田文學士の講演があつた、會する者小學校長其他五百餘名。

△東金コドモ會の活動

東金コドモ會は震災兒童に教授の微意を表せん爲め、九月九日總會を開いて、各自一日分の小遣を繰出す事に決議し、總額金三十四圓九十一錢を得て、東京及房州方面の震災兒童に寄贈した。

△金澤市教信

金澤市では九月十六日向山公園日蓮上人銅像前で、門下各教團主催の慘死者追悼會を舉行了。又八月中旬に十回、九月中に八回、十月中に九回各所で講演會を開き、窪田石橋本郷の諸氏が講演した。

に覺醒すべきか△同日三菱内燃機製作所に於て、本多親下の「大慘害所感」△同日日本車輛に於て松本聖晴師の「震災所感」と題する講演があつた。

同十一月

二十日豊田式機に於て、本多親下の「震災詔書に就て」△同日豊田織布切工場に於て、本多親下の「關東震災の所感」△國支文學士の「關東震災の教訓」△同日山岸製材に於て、本多親下の「詔書を拜して」△國支文學士の「大慘害の教訓」△二十一日豊田本社に於て、本多親下の「御詔勅に就て」△同日三菱内燃機に於て、本多親下の「國民精神復興に關する詔書を拜して」△同日豊田式機尾頭工場に於て、國支文學士の「大慘害の教訓」△二十二日日本車輛に於て、本多親下の「風潮一變の時」△同日菊井紡織に於て、國支文學士の「大地震の教訓」△松本聖晴師の「誠」△同日名古屋鐵道局講習所に於て、本多親下の「三大自覺」の講演があつた。

豊田佐吉氏母堂の逝去

從來本宗及び自慶會の爲めに多大の盡す處ありし遺州吉美の一分の農家より身を起し本邦有数の機業家となつた豊田佐吉氏母堂えい子刀自が不幸永眠した爲十二月十八日午後二時より本多管長親下を願請し菩提寺妙立寺にて盛大なる葬儀を營んだ當日えい子刀自生前の徳を慕ひ湖西六ヶ町村の住民殆ど之に参列し同地方未曾有の大盛儀であつた。

新年の吉慶芽出度申納候

本多日生

恭賀新年

總本山妙滿寺

謹賀新年

顯本法華宗務廳

井村 顯日 威
武田 顯龍
川崎 英照
大森 日榮
中野 信良

謹賀新年

廣嶋市妙詠寺

能仁一十

謹賀新年

統一編輯局

國友 日 斌
兒玉 常 宣
古田 昂 生
中山 事 信

客員

井村 日 威
山根 日 東
笹川 日 堂
森川 日 修
武田 日 龍
小松 日 明
林尾 順 雄

大僧正本多日生師講述

法華經要文講義

な意味に於て人々を救つて行くといふ事を説いた、それが次の文である。

一一九、諸の善男子よ、若し衆生有つて我が所に來至するには、我れ佛眼を以て其の信等の諸根の利鈍を觀じて、度すべき所に隨つて、處々に自ら名字の不同、年紀の大小を説き、亦復現じて當に涅槃に入るべしと言ひ、又種々の方便を以て微妙の法を説いて、能く衆生をして歡喜の心を發さしめき。

大勢の生とし生ける者がこの佛と接觸を保つ時は、どういふ事になるかといふと、「我れ佛眼を以て其の信等の諸根の利鈍を觀じて」——「佛眼」とい

ふのは一方から云へば智慧の最高なるものが、一切智でありますから、一番の智慧を有つて居る譯であるけれども、併し衆生に對する時分には智とは言はぬ、上を向いて眞理に向ふ時は一切智であるが、下に衆生は向ふ時には、親が子に向ふやうなものであるから、その子供に對しての慈悲が現はれて來る。親が子供に向へば、「この子供は斯うしてやつたら宜しい、着物を着せて飯を食はせて、學校に入れたら宜しい」といふやうに考へる、いろ／＼智慧が働くけれども、それは皆その子供を慈愛する所の慈悲に導かれて、親の有つて居る智慧が發現するのである、智慧に依つて直ちに子に對つて居る譯ではない、慈悲が智慧を使つて向つて居るのである。その如くに、佛眼は智の眼であるけれども、衆生に對する時は慈眼といつて慈悲の眼といふのである。

この眼といふ事も非常に大事なので、心が人に向つて働く時分には眼が働くものである。眼を通して人間の精神は現はれる、鼻などでは分らぬ、人間が不愉快な感じを有つて居らうが、愉快な感じを有つて居らうが、鼻か耳では判らぬ、人間の身全體に於て意思を表白するものは眼だけである、眼を見ればその人の精神がよく判かる。これは寧ろ普通の人間は眼を見る力が薄い譯である、これが刑事であるとか又は検事といふやうな職をした人は、餘程眼を見ることが發達して居るだらうと思ふ、能く裁判の調べなどに「面を上げろ」といふが、ひよつと眼を睨めば「これは嘘を言ひ居るか」「本當か」といふ事が判かる譯である。それは子供などは餘程發達して居る、子供が甘へるやうな時には、ちよつと親の顔を見る、さうして「言うても大丈夫だ」と思ふと

る、さうして衆生の眼とこの佛の眼とが接觸するのである、手と手と握手するとか、抱擁するとか、救ひの手といふやうな言葉も使ふけれども、それは素人である、人間はさういふ事もあるけれども、本當は眼であると思ふ、眞實は救ひの眼と憧憬れの眼とが感應するのである。だから「佛眼を以て衆生の信等の諸根の利鈍を觀じて」といふ言葉が出て來るのである。

「信等」といふ「等」の字はいろいろのものを等收すると言つて、その中に收める言葉で、略する譯であります、これは詳しく言へば五根といつて「信根、念根、精進根、定根、慧根」といふのである。「信」は柔順なる精神を指すので、正しきもの、優れたものに對して服從して行く所の精神、即ち信順といふ事である。「念」はその善き事柄を憶念して忘れな

駄々を控ね出す、「これは今日は言うても駄目だ、コツンとやられるナ」と思ふ時には大人しく控へて居る、それから猫なども非常に能く人の眼を見る、例へば猫の好きな者と嫌ひな者と二人餘所の家に行つて坐つたとする、さうすると猫が、別に猫の好きな者の臭ひ、猫の嫌ひな者の臭ひといふ臭ひがする譯でもなからうけれども、ちよつと遠方からその人の顔を見る、その時に猫の嫌ひな者と好きな者の眼は、動き方が違ふと見える、それで「ハハハこつちの人は俺が好きだな」といふので、その膝の上に乗る。斯ういふやうな事は能くあるので、一切萬事の上に極く嚴密に觀察したならば、眼で大抵の事は直ぐ判ると思ふ、家に歸つて女房が機嫌が好いか悪いかと思ふ時でも、ちよつと眼さへ見れば直ぐ判断が附く譯だらうと思ふ、釋迦牟尼佛は慈眼を以て衆生を見

い事である。「精進」といふのはその正しき志、信念を、如何なる妨害が起つても破られんやうに維持し、貫き通すといふことである。「定」は紛糾錯亂する事の中にも落ついて狼狽しないで、精神の安定を維持する事である。「慧」は物事の是非得失を見て判断して行くことをいふのである。これ等を總括して「信等の諸根」と言つたので、さういふやうな事柄に就ての利鈍であるから、その優れて居る者と劣つて居る者との有様を見て、この者には斯うして行かなければならぬといふ見定めをつけて、それに適當したる濟度の手を下して行く譯である。そこで「度すべき所に随つて」、いろいろの教が起つて來る、或る場合には名前も違つて出て來る。それはいろいろ阿彌陀如來であるとか、觀世音菩薩であるとかいふやうな名前が違つても、大體佛教の「ア、いふ名前は皆意

味から附いて居るので、「八犬傳」などにいろ／＼の名前がありますけれども、あれは仁義禮智信といふやうな道徳的の名前を附けてある、やはり名前のおやうな人格がその人間に依つて代表されて居るやうに作られて居るが、寧ろその事柄から名前を附けて居るのであるから、佛敎のいろ／＼の名前なども、さういふ人格があつてその名前があるといふよりは、衆生を教化する爲に左様な名前がいろ／＼違つたり年代が違つたりした、説明式を用ひたものである。丁度小説家がいろ／＼の名前を假設して、さうして自分の言はんとする所の理想を其處に現す、脚本でもやはりその通りである、その名前などに拘泥する必要は無い、その脚本に現れて居る全體を纏うて居る事柄なり理想なりに於て、價值を見て行けば宜い譯である、それは脚本作者の理想である。釋迦牟尼

佛は一代の活動の上に、様々の名前なり左様なことを説いた、即ち佛眼を以て彼等の利鈍を見て、度すべき所に随つていろ／＼な名前や年代の違ふことを言つた譯である。又時には涅槃に入るといふやうなこともいふ、それは何時も同じ者としては現れて居らぬから、そこにいろ／＼の手段を用ひ、又様々なる方便を以て微妙の法を説くのである、方便を以て微妙の法を説くといふことは、それに適當したる方に於て完全なる教を説いて行くといふことである、方便といふは餘程意味の大切な事である。さうして「能く衆生をして歡喜の必を發さしめさ」で、その教を受けては如何なる者でも歡喜の心を發すやうにした譯である、この歡喜の心といふが佛敎の利益の總體と言つて宜い、如何なる場合にも歡喜の心を失はぬやうにすれば、その人は大なる利

益を受けて居るのである、何か「御利益」と言つたならば劣等な物質的の物を考へたりするけれども、物質的に何かを得て居つても、心が惱んで居れば御利益ではない譯である、例へば日蓮聖人が佐渡ヶ島に流されて居る時に「これは日蓮に取つては利益だ」と自ら言つて居る、伊豆に流された時も同じ様に言うて居る、あの歡喜の心を失はないであつたならば、人間は實に幸福な譯である、所謂感謝の生活、法悦の生活といふことは、歡喜の心を起して居る者といふのであります。それ故に茲に利益が完成するので、この歡喜の心を起すといふ事に依つて佛陀の利益が現れて居る譯であります。

此處までが三世益物の中の過去益物の一段であります、すつと古い時から衆生を教化せられて居つた事を説いたので、この次が現在益物の一段になるの

であります。

次の二二〇より二二五に至る迄が「現在益物」といふ科段になつて居るので、前回に申した「三世益物」といふことが壽量品の教義に於て大事な點であつて、本佛が過去に於ても始め無き以前より活動を續けて來て居る、それから現在も亦同じやうにその働きの現はれが天竺に出現した釋迦となつたのである、さうして未來益物の方から言へば、跋提河の邊に入滅を告げても、その後も本身は常住し、同じやうに衆生を濟度しつゝ活動を續けて居られるものであるといふ所に、三世に渡つて活動常住の如來といふことが、壽量品の大事な點なのであります。

そこでこの前の所に於ては過去の有様を説いたのであります、始め無き以前より今度天竺に生れて來る迄その間何をして居つたかと、言へば、斯く／＼の

活動をして衆生を濟度したものであるといふこと、それが時間に於ては始め無き以前より今日に至つて居るし、空間に於ては娑婆世界を中心にして十方に活動して居る所の絕對的の佛であるといふ意味を、能くこの前に説かれて居つたのであります。それと同じ事がこの現在益物章に出て居る。それで未來益物章は長行の文には略してあるので、即ち一二五の終ひの一句が「未來を説きしなり」と天台大師が言うて居る、即ち「常住不滅」の四字が未來を説きしもので過去の狀態、現在の狀態を説いたから、その同じ狀態が永遠に續いて行くといふことになるから、未來に就てはさう詳しく説く必要もない、そこで常住不滅の四字この現在および過去に於ての活動と同一の事が存続しつゝあるものぢやと推知せらるる譯であるから、それ故に略して四字に纏めたもの

である、自我偈の方に行くところの未來益物が詳しくなつて居る、それは畢竟文章の省略法に依つてさうなる譯であるから、事實の佛は三世等しく同一の活動をなさつて居るものと見なければならぬ。或る日蓮門下の者にして、釋尊の出現の時に約して、在世には釋迦が本佛だけれども、末法今日に就ては日蓮が本佛だといふやうなことを言ふ人があるけれども、さういふ少しの時間に依つてその活動力が止るやうなことでは、本佛といふことは出來ぬ、壽量品は「在世だけに於て釋迦が本佛だ」といふやうな意味にはなつて居らぬ、過去に於ても未來に於ても、三世に亘り又十方に亘つて活躍して居るので唯だ三千年前天竺に出た時、又處はこの世界の天竺だけに於てえらい、その狭い空間に於てえらい、短かい時間に於てえらいといふやうな意味にはなつて

居らぬ、非常な長い無限の時間、又際限なき空間に於て絕對の佛であるといふ事になるから、それは時間を貫いて考へなければならぬ、釋迦出現の時には釋迦がえらいけれども、入滅しては隱居したやうなものだ」といふやうなことは、壽量品の經意を了解し得ないことになると思ふのであります。これは他からいふのではないが、日蓮門下にさういふ俗論が起つて割合に勢力を得て居る、素人からいへば「日蓮宗だから日蓮聖人を本位にして説けば宜い」とか、「吾々は日本人だから同一日本人の日蓮の味方をした方が宜い」とかいふやうな事を考へて居るけれども、それは全く凡情といふものであつて、高遠なる宗教の絕對人格者を論ずる上に、即ち哲學とか宗教のさういふ高遠な意味を論ずるに、「同一國民であるからその方に最負する」とか、そんな事は愚にもつか

ぬ考へであらうと思ふ、そんなケチな思想の者には、この壽量品の高遠なる理想、教義は領解し得ないものだと思つて居るのであります。これは餘計な事であるけれども、ちよつと胸に浮んだから申し添へて置くのである、そんな愚な所に引つかゝらないで、壽量品の教旨のある所を正解しなければならぬと思ひます。この「三世益物」といふ一言が壽量品の骨子であるといふ事を領解すれば、そんな問題は起らないことであらうと思ふ。

それで前と同じやうな型に於て「現在益物」の事が説かれるので、前に言葉の足らなかつたやうな事が現在益物の章で出て来る、この兩方を併せて何時も釋迦はさういふ活動を續けて居るといふ事を見れば宜い譯であります。

一一〇、諸の善男子よ、如來は諸の衆

生の小法を樂へる徳薄垢重の者を見ては、是の人の爲に我れ少くして出家し、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く、然るに我れ實に成佛してより已來、久遠なること斯の如し、但だ方便を以て衆生を教化して、佛道に入らしめんとして是の如き説を作す。

これは釋尊が今度この娑婆世界に出て來た時に、いきなり本佛だといふ事の名乗を掲げることが出来ない、といふものは、世間の人は考へが小さいものである、又迷うて居る者であるからして、さういふ徳薄く垢重き罪の者の爲には、いきなり本佛だといつて、雲の中から顔を出したやうなことで濟度が出来ないから、それでこの人間に應同して迦毘羅衛

城の王子として生れ、總べて人間と同一の感覺を有つて、愛着の絆の切りにくい人間の仲間來つてさうして模範を示して、總ての經歷が、一般の凡夫に於ても、成る程えらい人だ」と考へるやうな事から段々出發して行かなければならぬと思つたから、そこで「少くして出家し」で、これは一般には十九出家といつて居るけれども、お經の正確な所では二十九出家、三十五成道となつて居りますが、何れにしても若くして出家して、それから六年の間の修行を積んで、阿耨菩提即ち無上の正覺を得たといふ風に示し、且つ自分もさういふ態度で佛法を説いて來たのである、併しそれは迷へる衆生の機根に應じて左様な態度を示したけれども、その内面の眞實を語るうものならば、「我れ實に成佛してより已來、久遠なること斯の如し」で、前に説きし如く——前には五百

恭賀新禧

日蓮主義宣傳活動寫眞株式會

京都市高辻通柳馬場西入

大正十三年一月一日

村雲尼公貌下題字
妹尾朔著

鍋かぶり日親

▲中版百六十頁全一冊
▲定價送料共金七拾錢

久遠成院日親上人の正傳として偉大なる宣傳力を現はしたる
映畫「鍋かぶり日親」を其儘書冊となしたるもの、御一讀を希ふ

發行所 日蓮主義宣傳活動寫眞株式會社

新刊

本多日生現下著書一覽

- 法華經の心髓 金壹圓六拾錢
 - 日蓮主義初歩 金七拾錢
 - 日蓮主義 金壹圓五拾錢
 - 修養と日蓮主義 金壹圓五拾錢 (品切れ)
 - 國民道德と日蓮主義 金壹圓五拾錢
 - 日蓮聖人正傳 金貳圓貳拾錢
 - 日蓮主義綱要 金貳圓貳拾錢 (品切れ)
 - 日蓮聖人の感激 金貳圓貳拾錢 (品切れ)
 - 日蓮主義の運用 金貳圓五拾錢
 - 東洋文明の權威 金貳圓貳拾錢
 - 國民教化 金貳圓貳拾錢
 - 法華經の伴侶 金貳圓貳拾錢
 - 思想問題の歸結と法華經 金貳圓
 - 聖訓要義 各卷壹圓貳圓貳拾錢
 - 開目抄詳解 上卷一部金貳圓八拾錢
 - 聖語錄 金貳圓八拾錢
 - 優婆塞戒經通解 金八拾五錢
 - 大乘本生心地觀經通解 金八拾五錢
 - 法華經講義 以上各送料一部金八錢
- 上巻下巻各一部金壹圓四十錢
送料一部金十八錢

目次

うのゝる奥山今日こえて
我等如何に進むべきか
國民精神の涵養
國防上の急務
常樂庵隨筆
法華經要文講義
記事報導

本多 日 生
本多 日 生
本多 日 生
本多 日 生
本多 日 生
本多 日 生
本多 日 生

第廿八年二月號

○大藏經要義 一部金壹圓八十錢十一卷迄既刊
○法華經要文 送料一部金拾八錢半前金送料不要
○佛教信仰の正統 上製金五拾錢送料一部金貳錢
金壹圓參拾錢郵稅六錢
以上講讀希望の方は左記へ申込まるべし
東京市外品川町妙國寺内
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

料告發		價定一統	
一	冊	一	冊
半	冊	一	冊
四分ノ一	冊	一	冊
頁	頁	金貳圓貳拾錢	送料五厘
金	金	金壹圓貳拾錢	送料共
六	圓	金貳圓貳拾錢	送料共
圓	圓		
半	半		
		事の金前	

大正十二年拾二月二十七日印刷納本(第三百四十六號)
大正十三年一月一日發行(行第三百四十六號)
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼 國友 斌
印刷人 鈴木 日 雄
印刷所 振替東京五一〇七一番
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所 振替東京五一〇七一番
名古屋市東區千種町字五反田廿五番地
編輯所 振替東京五一〇七一番
名古屋市中區代町字城山七十七番地
統 統 統
編輯所 統
電長名古屋東五四八七番

